

# 應劭『風俗通義』皇霸篇訳注稿(上)

道家 春代

本稿は、後漢應劭『風俗通義』第一、皇霸篇の訳注である。本文には原則として呉樹平『風俗通義校釋』(天津人民出版社、一九八〇年)を用い、王利器『風俗通義校注』(中華書局、一九八一年)、香港中文大學中國文化研究所『風俗通義逐字索引』(香港・商務印書館、一九六六年)、趙泓『風俗通義全訳』(貴州人民出版社、一九九八年)、及び季嘉玲「風俗通義校注」(『臺灣師範大學研究所集刊』第二十一號、一九七七年)を参照した。残念ながら朱季海『風俗通義校箋』(學術書林、一九九六年)は入手できず、見ることができなかった。

## 目次

- 0 (序)
- 1 三皇
- 2 五帝
- 3 三王
- 4 五伯

(下)に続く

## 0 (序)

蓋天地剖分、萬物萌毓(1)、非有典藝(2)之文、堅基可據、推當今以覽太古、自昭昭而本冥冥(3)、乃欲審其事而建其論、董其是非而綜其詳矣(4)、言也實爲難哉。故易紀三皇、書叙唐、虞、惟天爲大、唯堯則之、巍巍其有成功、煥乎其有文章(5)。自是以來、載籍(6)昭哲。然而立談者人異、綴文者家舛、斯乃楊朱哭於歧路(7)、墨翟悲於練素者也(8)。是以上述三皇、下記六國、備其終始、曰皇霸。

### 〔注〕

(1) 『漢書』五行志中之上「(雷)入地則孕毓根核，保臧蟄蟲，避盛陰之害。」師古曰「毓字與育同。」

(2) 『潛夫論』讚學「徒以其能自託於先聖之典經，結心於夫子之遺訓也。：索道於當世者，莫良於典。典者，經也。先聖之所制。」『漢書』藝文志「有六藝略。」師古曰「六藝，六經也。」

(3) 吳樹平、王利器は『淮南子』人間訓「人能由昭昭於冥冥，則幾於道矣」等を引いて、「昭昭」と「冥冥」を対にするのは漢代の人の習慣用法という。趙泓は「本」の意を「探究」とする。

『管子』正世「古之欲正世調天下者，必先觀國政，料事務，察民俗，本治亂之所生，知得失之所在，然後從事。」

(4) 「矣」字、吳樹平は史樹青先生が「失」の誤りとする説を是とする。王利器は劉師培の「略」の誤りとする説に従う。今、吳樹平に従う。

(5) 『論語』泰伯「子曰『大哉，堯之爲君也，巍巍乎。唯天爲大，唯堯則之。蕩蕩乎，民無能名焉。巍巍乎，其有成功也。煥乎，其有文章。』」

(6) 『史記』伯夷列傳「夫學者載籍極博，猶考信於六藝。詩書雖缺，然虞夏之文可知也。」

(7) 『荀子』王霸「楊朱哭衢塗，曰『此夫過舉踴步而覺跌千里者夫。』」哀哭之。」

(8) 『墨子』所染「子墨子言見染絲者而歎曰『染於蒼則蒼，染於黃則黃，所入者變，其色亦變，五入必，而已則爲五色矣。故染不可不慎也。』」『淮南子』説林訓「楊子見塗路而哭之，爲其可以南可以北。墨子見練絲而泣之，爲其可以黃可以黑。」『論衡』藝增「世俗所患，患言事增其實，著文垂辭，辭出溢其眞，稱美過其善，進惡沒其罪。……墨子哭於練絲，楊子哭於歧道，蓋傷失本，悲離其實也。」

### 〔記〕

そもそも天地が分かれて万物が萌え育ち始めたころには、經典はまだ作られておらず、その頃の事を知る確固たる根拠はない。だから現在の状況から推論して太古がどのようなであったかを考え、明らかな事柄を頼りに暗くて分からない事柄を探求するしかない。すなわちその事柄を審議

して論を組み立て、その是非を弁別して、詳しい事実と失われた事実とを総合しようというのである。まことに難しいことと言えよう。このようにして『易』は三皇の事を記し、『尚書』は唐堯と虞舜の言行を叙録した。これによって、天は至大であるが、ただ堯のみがその天に則って巍巍と聳え立つ功績を成し遂げ、その制度・文化が煥然と輝いていることを知ることができるのである。これ以後のことは、典籍に明確に書かれている。しかし、それらについて語る内容、文に綴る事柄は、人ごとに異なり学派ごとに食い違っている。そのあまりの隔たりは「楊朱は岐路に佇んで行く先がそれぞれ遠く離れてしまうことを嘆き、墨翟は白い絹がどんな色にも染めることができるのを泣く」という事態に陥っている。そこで始めに「三皇」のことを述べ、最後に「六国」の事を記し、この間の本末を全て明らかにし、本篇を「皇霸」と名付ける。

### 1 三皇(1)

春秋運斗樞説(2)「伏羲、女媧、神農是三皇也。皇者，天(3)，天不言，四時行焉，百物生焉(4)。三皇垂拱無爲(5)，設言而民不違(6)，道德玄泊(7)，有似皇天，故稱曰皇。皇者，中也，光也，弘也。含弘(8)履中，開陰布綱(9)，上含皇極(10)，其施光明，指天畫地(11)，神化潛通(12)，煌煌盛美(13)，不可勝量。」

禮號諡記(14)説「伏羲、祝融、神農(15)。」  
含文嘉記「伏羲、燧人、神農。伏者，別也，變也。戲者，

獻也，法也。伏羲始別八卦，以變化天下，天下法則，咸伏貢獻，故曰伏羲也(16)。燧人始鑽木取火，炮生爲熟，令人無復腹疾，有異於禽獸，遂天之意，故曰遂人也(17)。神農，神者，信也。農者，濃也。始作耒耜，教民耕種，美其衣食，德濃厚若神，故爲神農也。」

尚書大傳說(18)「遂人爲遂皇，伏羲爲戲皇，神農爲農皇也。遂人以火紀，火，太陽也。陽尊，故託遂皇於天。伏羲以人事紀，故託戲皇於人。蓋天非人不因，人非天不成也。神農(19)悉地力，種穀蔬，故託農皇於地。天地人道備，而三五之運興矣(20)。」

〔注〕

(1) 吳樹平は「三皇」の称が初めて見られるのは『呂氏春秋』と言う。禁塞「上稱三皇五帝之業以愉其意，下稱五伯名士之謀以信其事。」他三箇所。いづれも「三皇五帝」に誰が相当するかは言わない。『潜夫論』五德志「世傳三皇五帝，多以爲伏羲，神農爲二皇，其一者或曰燧人，或曰祝融，或曰女媧。其是與非，未可知也。我聞古有天皇，地皇，人皇，以爲或及此謂，亦不敢明。凡斯數，其於五經，皆無正文。故略依易繫，記伏羲以來，以遺後賢。雖多未必獲正，然罕可以浮游博觀，共求厥眞。」

(2) 『太平御覽』七六「春秋運斗樞曰『必犧、女媧、神農，是謂三皇也。皇者，合元履中，開陰布綱，指天畫地，神化潛通。』」同七七「應劭風俗通曰『春秋運斗樞曰皇天不言，四時行焉，百物生焉。垂拱無爲，謹言而民不違，道德玄泊，有皇天，故稱曰皇。皇者，中也。光也。合元履中，開陰布綱，上合皇極，其施光明，指天畫地，神化潛通。煌煌盛美，不可勝量。』」

(3) 『詩經』大雅文王「世之不顯，厥猶翼翼，思皇多士，生此王國。」毛傳「皇，天。」鄭箋「願天多生賢人於此邦。」

(4) 『論語』陽貨「子曰『予欲無言。』」子貢曰「子如不言，則小子何述焉。」子曰「天何言哉。四時行焉，百物生焉。天何言哉。」

(5) 『尚書』武成「列爵惟五，分土惟三。建官惟賢，位事惟能。重民五教，惟食喪祭。惇信明義，崇德報功，垂拱而天下治。」孔傳「言武王所修皆是所任得人，故垂拱而天下治。」『說文解字』「拱，斂手也。」

(6) 『太平御覽』七七「設言」を「謹言」に作る。注(2)参照。『晉書』刑法志「傳曰『三皇設言而民不違，五帝畫像而民知禁。』」

(7) 『老子』「我獨泊兮，其未兆，如嬰兒之未孩。」

(8) 『太平御覽』七七「含弘」を「合元」に作る。吳樹平は宋太祖の諱「弘殷」を避けて「元」に改めたという。

(9) この四字、原「開陰陽布剛」に作る。吳樹平、『太平御覽』七七、『初學記』九等に從い、「開陰布綱」に改める。王利器は、下句頭の「上」の字を繋げて「開陰陽、布剛上」とする。吳樹平に從う。

(10) 『尚書』洪範「天乃錫禹洪範九疇，彝倫攸叙。『…次五日建用皇極。』」孔傳「皇，大，極，中也。凡立事，當用大中之道。」

(11) 『史記』魏其武安侯列傳「武安曰『…不仰視天而俯畫地，辟倪兩宮間，幸天下有變，而欲有大功。』」集解「張晏曰『視天，占三光也。畫地，知分野所在也。畫地論欲作反事。』」

(12) 『易』繫辭下「神農氏沒，黃帝堯舜氏作，通其變，使民不倦。神而化之，使民宜之，易窮則變，變則通，通則久。是以自天祐之。」

(13) 蔡邕『獨斷』上「皇帝，至尊之稱。皇者煌也。盛德煌煌，

無所不照。帝者諦也。能行天道，事天審諦，故稱皇帝。」

(14) 不詳。

(15) 『白虎通義』號「三皇者何謂也。謂伏羲、神農、燧人也。或曰伏羲、神農、祝融也。禮曰『伏羲、神農、祝融，三皇也。』古之時，未有三綱六紀，民人但知其母，不知其父。能覆前而不能覆後。臥之誅誅，行之吁吁，飢即求食，飽即棄餘，茹毛飲血，而衣皮葦。于是伏羲仰觀象于天，俯察法于地，因夫婦，正五行，始定人道。畫八卦以治下，下伏而化之，故謂之伏羲也。謂之神農何。古之人民，皆食禽獸肉。至於神農，人民衆多，禽獸不足。於是神農因天之時，分地之利，制耒耜，教民農作。神而化之，使民宜之，故謂之神農也。謂之燧人何。鑽木燧取火，教民熟食，養人利性，避臭去毒，謂之燧人也。謂之祝融何。祝者屬也。融者續也。言能屬續三皇之道而行之，故謂祝融也。」

(16) 『藝文類聚』一一「禮含文嘉曰『伏羲德洽上下，天應以鳥獸文章，地應以龜書。伏羲乃則象作易。』」『太平御覽』七八「禮含文嘉曰『伏者別也，犧者獻也，法也。伏羲德洽上下，天應之以鳥獸文章，地應之以龜書。伏羲乃則象作易卦。』」

(17) 『太平御覽』七八「禮含文嘉曰『燧人始鑽木取火，炮生爲熟，令人無腹疾，有異於禽獸，遂天之意，故爲燧人也。』」

(18) 『漢書』藝文志「尚書古文經四十六卷，爲五十七篇。經二十九卷，大小夏侯二家，歐陽經三十二卷。傳四十一篇。」『隋書』經籍志「尚書大傳三卷，鄭玄注。：遭秦滅學，至漢，唯濟南伏生口傳二十八篇。：伏生作尚書傳四十一篇。」『太平御覽』七七「(應劭風俗通)又曰『大傳說，遂人爲遂皇，伏戲爲戲皇，神農爲農皇也。遂人以火紀，火，陽也。陽尊，故託遂皇於天。伏戲以

人事紀，故託戲皇以人。蓋天非人不固，人非天不成也。神農悉地力，種穀，故託農皇於地。天地人之道備，而三五之運興矣。』」

(19) 吳樹平、王利器共に盧文弨『羣書拾補』に従い、「神農」の下に「以地紀」を補うべきとする。これに従う。

(20) 『後漢書』郎顛襄楷列傳「(郎)顛對曰『：三事，臣聞天道不遠，三五復反。』李賢注「春秋合誠圖曰『至道不遠，三五而反。』宋均注云『三，三正也。五，五行也。三正五行，王者改代之際會也。能於此際自新如初，則通無窮也。』」

### 〔記〕

『春秋運斗樞』は次のように説く。「伏羲、女媧、神農が三皇である。皇とは天のことである。天はもの言わずとも、四季は運行し、百物は生育する。三皇も同様手を拱いて何も為さず、ただ言葉によって教えるだけで民はそれに背かない。その道徳は奥深く淡泊で皇天に似ている。そこで皇と称するのである。皇とは、中であり、光であり、弘である。弘く万物を包み込んで中正の道を踏み行い、地上を開拓して人に守るべき大綱を示し、皇極(天上の偉大な中正)に合致して、光明を恩施し、天象を観察し地上の様子を見て取り、神のように森羅万象の変化を深く知って民を導く。煌々と輝く徳の美しさは量り知ることができない。」

『礼号諡記』の説は「伏羲、祝融、神農」である。

礼緯『含文嘉』は次のように記す。「伏戲、燧人、神農である。伏戲の伏とは別であり、変である。戲とは献であり、法である。伏羲は万象に対応するよう初めて八卦を作って分別し、それによって天下万物の様々な変化を捉え、

天下の民にその法則を示すと、皆その貢献に伏した。故に名を伏羲というのである。燧人は初めて木を摩擦して火を取り、生ものにしつかり火を通して調理することを発明し、民が食中毒を起こさないようにし、禽獣から人間を分かち、天の意思を遂行した。故に名を遂人というのである。神農の神は信であり、農は濃である。初めて地を耕す耒耜（すき）を作り、民に農耕を教え、人びとの衣食生活を豊かにした。その徳は神のように濃厚であることから、神農というのである。」

『尚書大伝』は次のように説く。「遂人は遂皇、伏羲は戲皇、神農は農皇である。遂人は火によって民を統治した。火は大いなる陽である。陽は尊いので遂皇を天に充てる。伏羲は人事によって統治したので、戲皇を人に充てる。そもそも天は人だけが抛り所にするし、人は天を抛り所にしなければ社会を成り立たせることができない。神農は地によって統治した。大地の力を十分に活用し、穀物野菜を栽培した。そこで農皇を地に充てる。天地人の道がすべて備わって、ここから三統五行の循環が始まったのである。」

謹按、易稱（一）「古者伏羲氏之王天下也，仰則觀象於天，俯則觀法於地，始作八卦，以通神明之德，以類萬物之情。結繩爲網罟，以田以漁。伏羲氏没，神農氏作，斲木爲耜，揉木爲耒，耒耜之利，以教天下。日中爲市，致天下之民，通其變，使民不倦，神而化之，使民宜之。」唯獨叙二皇，不及遂人。遂人功重於祝融、女媧，文明大見。大傳之義斯

近之矣。

〔注〕

（一）『易』繫辭下「古者包羲氏之王天下也，仰則觀象於天，俯則觀法於地，觀鳥獸之文與地之宜，近取諸身，遠取諸物。於是始作八卦，以通神明之德，以類萬物之情。作結繩而爲罔罟，以佃以漁，蓋取諸離。包羲氏没，神農氏作，斲木爲耜，揉木爲耒，耒耜之利，以教天下，蓋取諸益。日中爲市，致天下之民，聚天下之貨，交易而退，各得其所，蓋取諸噬嗑。神農氏没，黃帝堯舜氏作，通其變，使民不倦，神而化之，使民宜之。」

〔訳〕

「謹んで考察いたします。『易』に次のように記されています。「太古、伏羲氏が天下に王となると、上を仰いで日月星辰の運行を観察し、下を向いて地理や鳥獸を観察し、それを手本として始めて八卦を作った。これによって神明の造化の徳に通じ、万物の実情を類型によって区分した。卦に倣って繩を編んで網を作り、それで獵や漁をすることを始めた。伏羲氏が世を去ると、神農氏が王となり、木を伐って犁の頭の部分を作り、木をたわめて柄の部分を作り、犁を使って農作業をする利便性を天下の人びとに教えた。また日が南中する時間に市場を開いて、天下の民を招き寄せた。天地万物の変化の法則に通じ、それに則って様々なことを教えて民が倦きて怠けることのないよう導いた。神のように教化して民にそれをよき物として受け入れさせた。」ここには二皇の功績しか述べられておらず、遂人のことに言及していない。しかし人びとに火を与えた功績は

祝融と女媧よりも重大で、文明はこれによって大いに開かれたのであるから、遂人を三皇に教える『尚書大伝』の説が真実に最も近いだろう。

## 2 五帝(1)

易傳、禮記、春秋國語、太史公記、黃帝、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜是五帝也(2)。

〔注〕

(1) 前條「三皇」第一段注(1)参照。吳樹平は、五帝が誰を指すか漢人の説は一つではないといい、『禮記』月令、『淮南子』天文訓等の「太皞、炎帝、黃帝、少皞、顓頊」説、孔安國『尚書』序の「少皞、顓頊、高辛、唐堯、虞舜」説、鄭玄注『尚書中侯』勅省圖の「黃帝、金天氏、高陽氏、高辛氏、陶唐氏、有虞氏」説を挙げる。『白虎通義』にも議論がある。注(2)参照。

(2) 『白虎通義』號「五帝者何謂也。禮曰『黃帝、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜、五帝也。』易曰『黃帝、堯、舜氏作。』書曰『帝堯』『帝舜。』」『史記』五帝本紀正義「案、太史公依世本、大戴禮、以黃帝、顓頊、帝嚳、唐堯、虞舜爲五帝。」『大戴禮記』五帝徳で宰我は孔子に黃帝、帝顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜、禹について質問している。

〔訳〕

『易』繫辭傳、『禮記』『大戴禮記』、『春秋國語』、『太史公記』、『史記』五帝本紀)は、黃帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜を五帝としている。

謹按、易、尚書大傳(1)、天立五帝以爲相、四時施生、法度明察、春夏慶賞、秋冬刑罰、帝者任徳設刑以則象之(2)。言其能行天道、舉錯審諦(3)。

黃帝始制冠冕、垂衣裳(4)、上棟下宇、以避風雨(5)、禮文法度、興事創業、黃者、光也(6)、厚也。中和之色(7)、徳施四季、與地同功、故先黃以別之也(8)。顓頊者、專也。項者、信也(9)、愨也。言其承文易之以質、使天下蒙化、皆貴貞愨也(10)。嚳者、考也、成也(11)。言其考明法度、醇美嚳然、若酒之芬香也。堯者、高也、饒也(12)。言其隆興煥炳、最高明也。舜者、推也、循也。言其推行道徳、循堯緒也(13)。

〔注〕

(1) 吳樹平は以下の文をすべて『尚書大傳』の文と見なしている。王利器は『易』については繫辭傳下にある「聖人制器尚象」についての文を言うと言い、『尚書大傳』については特に言わず、すべてをその文として括っていない。今王利器に従う。

(2) 『鹽鐵論』詔聖「文學曰『春夏生長、聖人象而爲令。秋冬殺藏、聖人則而爲法。故令者教也、所以導民人。法者刑罰也、所以禁強暴也。』」

(3) 『太平御覽』七六「應劭漢官儀曰『皇者大帝、言其煌煌盛美。帝者徳象天地、言其能行天道、舉措審諦、父天母地、爲天下主。』」『白虎通義』號「號言爲帝何。帝者諦也。象可承也。」「三皇」條第一段注(13)参照。

(4) 『易』繫辭下「黃帝堯舜、垂衣裳而天下治。蓋取諸乾坤。」(5) 繫辭下「上古穴居而野處、後世聖人易之以宮室。上棟下宇、

以待風雨。蓋取諸大壯。」

(6) 『説文解字』「黃、地之色也。从田疋聲。疋，古文光也。」『釋名』釋絲帛「黃、晃也。猶晃晃，象日光色也。」『漢書』天文志

「日有中道，月有九行。中道者黃道，一曰光道。」

(7) 『白虎通義』號「黃者中和之色，自然之性，萬世不易。黃帝始作制度，得其中和，萬世常存。故稱黃帝也。」

(8) 『白虎通義』諡「黃帝，先黃後帝者何。古者質，生死同稱，各持行合而言之，美者在。黃帝始制法度，得道之中，萬世不易。後世雖聖，莫能與同也。後世德與天同，亦得稱帝，不能制作。故不得復稱黃也。」

(9) 『白虎通義』號「謂之顓頊何。顓者專也。頊者正也。能專正天人之道，故謂之顓頊也。」

(10) 『淮南子』主術訓「其民樸重端慤。」高誘注「慤，誠也。」

(11) 『白虎通義』號「謂之帝嚳者何也。嚳者極也。言其能施行窮極道德也。」

(12) 『白虎通義』號「謂之堯者何。堯猶堯堯也。至高之貌，清妙高遠，優游博衍，衆聖之王，百王之長也。」

(13) 『白虎通義』號「謂之舜者何。舜猶舜舜也。言能推信堯道而行之。」

### 〔記〕

謹んで考察いたします。『易』と『尚書大伝』に次のように記されている。天は五帝を立てて補佐とし、四季が万物の生を育むのに倣い、法令制度を厳しく明確にした。春夏には善事を慶賀褒賞し、秋冬には刑罰を行う。帝は徳を施し刑を設けるが、それは春夏に万物が生長し秋冬に衰亡

するのを手本にしたのである。言ってみれば、帝は天に替わって道を行う能力を持ち、万事を慎重に公平に処置するのである。

黄帝は始めて冠冕の制度を作り、衣裳を身につけ、家屋を作って風雨を避け、原始的な生活から人びとを文明に導いた。礼儀・文辞・法令・制度を制定し、偉大な帝業を興した。黄とは光であり、厚恩であり、中和の色である。その徳の恩恵は四季に等しく、功績は地に匹敵する。故に黄の字を帝の前において、他の四帝と区別する。

顓とは専であり、頊とは信であり、誠である。顓頊とは、黄帝の文を承けて、それを質に転換し、天下の民がその徳化を蒙り、皆が誠信を貴ぶよう導いたことをいう。嚳とは、考であり、成である。法度を考究し明確にし、その徳の成果が極上の美酒のように芳醇であることをいう。堯とは高であり、豊饒である。その業績が高くそびえて燦然と輝き、最も高く明るいことをいう。舜とは、推であり、循（遵）である。道徳を推進し、堯の業績を遵守したことをいう。

### 3 三王(1)

禮號諡記説(2)「夏禹、殷湯、周武王是三王也。」尚書説「文王作罰，刑茲無赦(3)。」詩説「有命自天，命此文王(4)。」「文王受命，有此武功(5)。」「儀刑文王，萬國作孚(6)。」春秋説「王者孰謂，謂文王也(7)。」

### 〔注〕

(1) 『白虎通義』號「王者往也。天下所歸往。鉤命決曰『三皇步，

五帝趨，三王馳，五伯驚。』…三王者何謂也。夏殷周也。故禮士冠經曰『周弁殷冔夏收，三王共皮弁』也。『孟子』告子下「孟子曰『五霸者三王之罪人也。』」趙岐注「三王，夏禹、商湯、周文王是也。」

(2) 『太平御覽』七七(風俗通)又曰『禮號諡記說，夏禹、殷湯、周武王是三王也。禹者輔也。輔續舜後，庶績洪茂。自堯以上，王者子孫，據國而起，功德浸盛，故造美諡。舜、禹本以白衣，砥行顯名，升爲天子。雖復制諡，不如名著，故國名焉。湯者，禳也。言其攘除不軌。改亳爲商，成就王道，天下熾昌，文武皆以其長。夫擅國之謂王，能制殺生之威之謂王。王者往也。天下所歸往也。』

(3) 『尚書』康誥「乃其速由文王作罰，刑茲無赦。」孔傳「言當速用文王所作違教之罰，刑此亂五常者，無得赦。」

(4) 『詩經』大雅大明「有命自天，命此文王。」

(5) 大雅文王有聲「文王受命，有此武功。」

(6) 大雅文王「儀刑文王，萬邦作孚。」

(7) 『春秋公羊傳』隱公元年「春王正月…王者孰謂，謂文王也。」

### 〔訳〕

『礼号諡記』は「夏禹王、殷湯王、周武王が三王である」と説く。『尚書』康誥には「速やかに文王が作った罰により刑を執行し赦してはならぬ」と記されている。『詩經』大雅の「大明」の詩には「命が天より下され、文王がそれを受けた」とあり、「文王有聲」の詩にも「文王が天命を受け、此の武王の功がある」とあり、また「文王」の詩にも「文王を手本として、万邦が誠実になった」とある。『春秋公羊伝』には「王とは誰か、文王である」と説いている。

(このように文王を三王に数えるものと、武王にするものと二説がある。)

謹按，易稱「湯 武革命(1)」。尚書「武王戎車三百兩，虎賁八百人，擒紂於牧之野(2)」。惟十有三祀，王訪于箕子(3)。詩云「亮彼武王，襲伐大商(4)」。「勝殷遏劉，耆定武功(5)」。由是言之，武王審矣。論語「文王率殷之叛國(6)，以服事殷(7)」。「時尚臣屬，何緣便得列三王哉。經美文王三分天下有其二(8)，王業始兆於此耳。俗儒(9)新生(10)不能採綜，多共辨論，至於訟閱(11)。大王、王季皆追號(12)，豈可復謂已王乎。」

禹者，輔也，輔續舜後，庶績洪茂。自堯以上，王者也(13)子孫，據國而起，功德浸盛，故造美諡(14)。舜、禹本以白衣(15)，砥行顯名(16)，升爲天子。雖復更制(17)，不如名著，故因名焉。經曰「有鰥在下，曰虞舜(18)」。「僉曰伯禹，禹平水土(19)」是也。湯者，攘也，昌也。言其攘除不軌，改亳爲商(20)，成就王道，天下熾盛，文武皆以其所長。夫擅國之謂王，能制割之謂王，制殺生之威之謂王(21)。王者，往也，爲天下所歸往也(22)。

### 〔注〕

(1) 『易』革卦「彖曰…湯武革命，順乎天而應乎人。」

(2) 『尚書』牧誓「武王戎車三百兩，虎賁三百人，與受戰于牧野，作牧誓。」孔傳「勇士稱也。若虎賁獸，言其猛也。皆百夫長。」

『風俗通義』正失篇宋均令虎渡江「謹按，尚書『武王戎車三百兩，虎賁三千人，擒紂於牧野。』」『太平御覽』二四一「應劭漢官儀曰

『虎賁中郎將，古官也。書稱，武王伐紂，戎車三百兩，虎賁三百人，擒紂於牧之野。言猛怒如虎之奔赴。平帝元始元年，更名虎賁郎。古有勇者孟賁，改奔爲賁。』王利器は孫星衍『尚書今古文注疏』の革車一台に十人の士が乗るので、虎賁三千人が正しい、との説を引く。

(3) 『尚書』洪範「武王勝殷，殺受立武庚，以箕子歸，作洪範。惟十有三祀，王訪于箕子。」孔傳「商曰祀，箕子稱祀，不忘本。」『爾雅』釋天「載，歲也。夏曰歲，商曰祀，周曰年，唐虞曰歲，歲名也。」

(4) 『詩經』大雅大明「維師尚父，時維鷹揚，涼彼武王。肆伐大商，會朝清明。」毛傳「師，大師也。尚父，可尚可父，：：涼，佐也。肆，疾也。會，甲也。不崇朝而天下清明。」鄭箋「尚父，呂望也，尊稱焉。：：佐武王者，爲之上將。肆，故今也。會，合也。以天期已至，兵甲之強，師率之武，故今伐殷，合兵以清明。書牧誓曰『時甲子昧爽，武王朝至于商郊牧野乃誓。』釋文「涼，本亦作諒。同力尚反。韓詩作亮，云相也。」『詩三家義集疏』「韓，涼作亮。韓說曰亮，相也。魯，涼作亮，肆作襲。：：陳喬樞云，：：襲者，公羊何注以爲『輕行疾至』，則亦與肆義同矣。」

(5) 『詩經』周頌武「允文文王，克開厥後。嗣武受之，勝殷遏劉，耆定爾功。」毛傳「武，迹，劉，殺，耆，致也。」鄭箋「遏，止，耆，老也。嗣子武王，受文王之業，舉兵伐殷而勝之，以止天下之暴虐而殺人者，年老乃定女之此功。言不汲汲於誅紂，須暇五年。」

『詩三家義集疏』「魯，爾作武。」

(6) 『論語』にこの句なし。『春秋左氏傳』襄公四年「春，楚師爲陳叛故，猶在繁陽。韓獻子患之，言於朝曰『文王帥殷之叛國以事

紂。唯知時也。今我易之難哉。』

(7) 『論語』泰伯「孔子曰『：：三分天下有其二，以服事殷。周之德，可謂至德也已矣。』」

(8) 注(7)参照。

(9) 『後漢書』宣張二王杜郭吳承鄭趙列傳「杜林字伯山，扶風茂陵人也。：：林從竦受學，博洽多聞，時稱通儒。」李賢注「風俗通曰『儒者區也。言其區別古今，居則翫聖哲之詞，動則行典籍之道，稽先王之制，立當時之事，此通儒也。若能納而不能出，能言而不能行，誦誦而已，無能往來，此俗儒也。』」

(10) 『漢書』匡張孔馬傳「張」禹則謂上曰『：：新學小生，亂道誤人，宜無信用，以經術斷之。』

(11) 『詩經』小雅常棣「兄弟鬩于牆，外禦其務。」毛傳「鬩，很也。」疏「很者忿爭之名。」

(12) 『禮記』大傳「牧之野，武王之大事也。既事而退，柴於上帝，祈於社，設奠於牧室。遂率天下諸侯，執豆籩，逡奔走，追王大王亶父、王季歷、文王昌，不以卑臨尊也。」

(13) 吳樹平、王利器共に「也」を衍字とし、「自堯以上王者，子孫據國而起」と句切るが，下の「舜、禹本以白衣：：」に対応するよう「王者子孫，據國而起」と句切って解釈する。

(14) 『太平御覽』七七に従い「美論」を「美諡」と改めて解釈する。前段注(2)参照。

(15) 「白衣」は平民の服装。『史記』儒林列傳「公孫弘以春秋，白衣爲天子三公，封以平津侯。」五帝本紀「窮蟬父曰帝顓頊，顓頊父曰昌意，以至舜七世矣。自從窮蟬以至帝舜，皆微爲庶人。」夏本紀「禹者，黃帝之玄孫而帝顓頊之孫也。禹之曾大父昌意及父鯀

皆不得在帝位，爲人臣。」

(16) 『史記』伯夷列傳「閭巷之人，欲砥行立名者，非附青雲之士，惡能施于後世哉。」正義「砥音旨。礪行脩德在鄉閭者，若不託貴大之士，何得封侯爵賞而名留後代也。」

(17) 吳樹平、『羣書拾補』に従って「更制」を「制諡」に作るのがよいとする。これに従う。

(18) 『尚書』堯典「帝曰『咨，四岳，朕在位七十載，汝能庸命，巽朕位。』」師錫帝曰『有齔在下，曰虞舜。』孔傳「師，衆，錫，與也。無妻曰齔。虞，氏，舜，名。在下民之中。衆臣知舜聖賢，恥己不若，故不舉。乃不獲已而言之。」

(19) 『尚書』舜典「舜曰『咨，四岳，有能奮庸熙帝之載，使宅百揆。亮采惠疇。』」僉曰「伯禹作司空。」帝曰「兪。咨，禹，汝平水土，惟時懋哉。」孔傳「四岳同辭而對。禹代鯀爲崇伯，入爲天子司空。治洪水有成功，言可用之。」『尚書』呂刑「乃命三后，恤功于民。……禹平水土，主名山川。」

(20) 『史記』殷本紀「主癸卒，子天乙立，是成湯。成湯，自契至八遷。湯始居亳，從先王居，作帝誥。」集解「諡法曰『除虐去殘曰湯』孔安國曰『契父帝嚳都亳，湯自商丘遷焉，故曰從先王居。』」正義「按，亳，偃師城也。商丘，宋州也。湯卽位，都南亳，後徙西亳也。」

(21) 『戰國策』秦策三「范雎曰『臣居山東，聞齊之內有田單，不聞其王。聞秦之有太后、穰侯、涇陽、華陽、高陵，不聞有王。夫擅國之謂王，能專利害之謂王，制殺生之威之謂王。』」

(22) 『春秋穀梁傳』莊公三年「其曰王者，民之所歸往也。」『說文解字』「王，天下所歸往也。董仲舒曰『古之造文者，三畫而連其

中謂之王。三者，天地人也。而參通之者王也。』孔子曰『一貫三爲王。』『白虎通義』號「帝王者何，號也。號者功之表也。所以表功明德，號令臣下者也。德合天地者稱帝，仁義合者稱王，別優劣也。……號言爲帝何。帝者諦也，象可承也。王者往也，天下所歸往。」

### 〔訳〕

謹んで考察いたします。『易』革卦彖辭に「湯王、武王の革命」とある。『尚書』牧誓に「武王は戦車三百輛、虎賁（勇士）八百人を率いて殷と闘い、紂王を牧野で擒にした」とあり、洪範には「殷に勝利して十三年目に武王は箕子を訪ねた」とある。大雅「大明」の詩に「尚父呂望は）かの武王を補佐し、疾走して大商を伐つ」とあり、周頌の「武」には「（文王の嗣子武王は）殷に勝利して（紂王による）殺戮を止めた」とある。これらに由って言えば、武王が三王に数えられるのは明らかである。『論語』に「文王は殷の叛国を率いたが殷に仕えた」とある。このように当時のお臣として殷に服属していたのに、何の根拠があつて文王を三王に列することができるのか。経典は文王が天下の三分の二を有し、王業がここを端緒に始まったことを賛美しているにすぎない。経典に書かれていることをそのまま復唱するだけでその真義を理解できない俗儒や学問を始めたばかりの学生が、総合的に判断して弁論することができず、「文王か、武王か」という論争に至ってしまったのだ。古公亶父を「大王」と称し、文王の父季歴を「王季」と称するのは皆武王が追号したものであり、当時から

すでに王であったということができないのと同じだ。

禹とは、輔である。舜を補佐しその後を継いで多くの業績を成し遂げた。堯以前の帝王は、もともと王者の子孫であり、拠って立つ国があり、代々の功業と恩沢がだんだんと盛んになったので、美しい諡が造られた。しかし舜と禹はもともと平民の出身であり、身を粉にして働いて名が知られるようになり、天子の地位に昇った。没後諡が議論されたが、本名の著明であることに及ばず、本名を諡とした。『尚書』堯典に「(四岳が堯帝に舜を薦めて)下民の中に未婚の虞舜というものがおります」と記され、舜典に「皆が伯禹を司空とすべきである、禹は水土を治めたと言った」と記されていることから、舜・禹が名であることが分かる。湯とは攘であり、昌である。無軌道な夏桀王を攘い除き、先王の居であった亳に遷って商の都とし、王道を成就し、天下の隆盛をもたらし、文武両道を兼ね備えた。

いったい国の専権を掌握するものを王といい、利害を制するものを王といい、生殺を決定する権威をもつものを王という。王とは往であり、天下の人びとすべてが帰順し向かって往く所なのである。

#### 4 五伯(1)

春秋説、齊桓、晉文、秦繆、宋襄、楚莊是五伯也(2)。

〔注〕

(1) 「五霸」に同じ。「伯」と「霸」は通用する。

(2) 「五霸」に誰を挙げるかには諸説ある。『白虎通義』號は先ず

①「昆吾氏、大彭氏、豕韋氏、齊桓公、晉文公」を挙げ、「或曰」として②「齊桓公、晉文公、秦穆公、楚莊王、吳王闔廬」、③「齊桓公、晉文公、秦穆公、宋襄公、楚莊王」の二説を挙げる。①説には、『呂氏春秋』先己篇高誘注、『春秋左氏傳』成公二年杜預注などがあり、③説には『孟子』告子下趙岐注、『呂氏春秋』當務篇高誘注がある。他に『荀子』王霸篇、『呂氏春秋』當染篇の④「齊桓公、晉文公、楚莊王、吳王闔廬、越王勾踐」、『漢書』諸侯王表顏師古注の⑤「齊桓公、宋襄公、晉文公、秦穆公、楚莊王、吳王扶差」がある。諸説ある理由を、王利器は「伯」に二義がありさらに「霸」と混同したからという。「要之、皆未明晰伯、霸之分、致言有異同耳。伯於此具有二義、一爲五等爵之伯、一爲諸侯長之伯、古人以後者別於前者、讀伯如霸、後遂與霸混耳。」

〔訳〕

『春秋』の説では、齊桓公・晉文公・秦繆公・宋襄公・楚莊王が五伯である。

謹按、春秋左氏傳(1)、夏后太康、娛於耽樂、不脩民事(2)、諸侯僭差。於是昆吾氏(3)乃爲盟主、誅不從命、以尊王室。及殷之衰也、大彭氏、豕韋氏(4)復續其緒、所謂王道廢而霸業興者也(5)。

齊桓九合一匡(6)、率成王室、責彊楚之罪、復青茅之貢(7)。晉文爲踐土之會(8)、修朝聘之禮(9)、納襄剋帶(10)、翼戴天子(11)。孔子稱「民到于今受其賜(12)」。又曰「齊桓正而不譎、晉文譎而不正(13)」。

至於三國、既無歎譽一言。而繆公受鄭甘言、置戍而去(14)、

違黃髮之計，而遇殺之敗(15)，殺賢臣百里奚(16)，以子車氏爲殉，詩黃鳥之所爲作(17)，故諡曰「繆」(18)。襄公不度德量力(19)，慕名而不綜實(20)，六鷁五石，先著其異(21)，覆軍殘身，終爲僂笑(22)。莊王僭號(23)，自下摩上，觀兵京師，問鼎輕重(24)，恃彊肆忿，幾亡宋國，易子析骸(25)，厥禍亦巨。皆無興微繼絕，尊事王室之功。世之紀事者不詳察其本末，至書於竹帛，同之伯功，或誤後生，豈不暗乎。

## 〔注〕

(1) 『春秋左氏傳』に以下の文無し。王利器は「傳」は「說」に作るべきで、左氏の先師が五霸について説いた文とする。

(2) 『史記』夏本紀「夏后帝啓崩，子帝太康立。帝太康失國，昆弟五人，須于洛汭，作五子之歌。」『尚書』五子之歌「太康失邦，昆弟五人，須于洛汭，作五子之歌。太康尸位以逸豫，滅厥德，黎民咸貳。乃盤遊無度，畋于有洛之表，十旬弗反。有窮后羿因民弗忍，距于河。」孔傳「啓子也。盤于遊田，不恤民事，爲羿所逐，不得反國。」

(3) 『國語』鄭語「祝融亦能昭顯天地之光明，以生柔嘉材者也，其後八姓於周末有侯伯。佐制物於前代者，昆吾爲夏伯矣，大彭、豕韋爲商伯矣。」韋昭注「昆吾，祝融之孫，陸終第一子，名樊，爲己姓，封於昆吾，昆吾衛是也。其後夏衰，昆吾爲夏伯，遷於舊許。」

(4) 注(3)参照。韋昭注「大彭，陸終第三子，曰錢，爲彭姓，封於大彭，請之彭祖，彭城是也。豕韋，彭姓之別封於豕韋者也。殷衰，二國相繼爲商伯。」

(5) 『白虎通義』號「五霸者何謂也。昆吾氏、大彭氏、豕韋氏、

齊桓公、晉文公也。昔三王之道衰，而五霸存其政，率諸侯朝天子，正天下之化，興復中國，攘除夷狄，故謂之霸也。昔昆吾氏，霸於夏者也。大彭、豕韋，霸於殷者也。齊桓、晉文，霸於周者也。」

(6) 『論語』憲問「子路曰『桓公殺公子糾，召忽死之，管仲不死，曰未仁乎。』子曰『桓公九合諸侯，不以兵車，管仲之力也。如其仁，如其仁。』子貢曰『管仲非仁者與。桓公殺公子糾，不能死，又相之。』子曰『管仲相桓公，霸諸侯，一匡天下。民到于今受其賜。』」『史記』齊太公世家「是時周室微，唯齊、楚、秦、晉爲彊。

晉初與會，獻公死，國內亂。秦穆公辟遠，不與中國會盟。楚成王初收荊蠻有之，夷狄自置。唯獨齊爲中國會盟，而桓公能宣其德，故諸侯賓會。於是桓公稱曰『：寡人兵車之會三，乘車之會六，九合諸侯，一匡天下。皆三代受命，有何以異於此乎。吾欲封泰山，禪梁父。』」

(7) 吳樹平、王利器ともに「青」は「菁」に作るべきという。『尚書』禹貢「荊及衡陽惟荊州。：：甌菁、茅」孔傳「甌，匣也。菁以爲菹，茅以縮酒。」『春秋左氏傳』僖公四年「春，齊侯以諸侯之師侵蔡，蔡潰，遂伐楚。楚子使與師言曰『：：不虞君之涉吾地也，何故。』管仲對曰『昔召康公命我先君大公曰五侯九伯，女實征之，以夾輔周室。賜我先君履東至于海，西至于河，南至于穆陵，北至于無棣。爾貢包茅不入，王祭不共，無以縮酒，寡人是徵。昭王南征不復，寡人是問。』對曰『貢之不入，寡君之罪也。敢不共給。昭王之不復，君其問諸水濱。』師進次于陘。」

(8) 僖公二十六年冬、宋が楚から離反して晋についたので、楚は宋に侵攻した。二十七年冬、楚が諸侯とともに宋を包圍すると、宋は晋に事態の急迫を伝えた。『春秋左氏傳』僖公二十八年「夏

四月戊辰、晉侯、宋公、齊國歸父、崔夭、秦小子憖、次于城濮。

：楚師敗績。子玉收其卒而止，故不敗。晉師三日館穀。及癸酉而還。甲午至于衡雍，作王宮于踐土。：五月丙午，晉侯及鄭伯，盟于衡雍。：己酉，王享醴，命晉侯宥。王命尹氏及王子虎、內史叔興父，策命晉侯爲侯伯。：晉侯三辭，從命曰『重耳敢再拜稽首，奉揚天子之丕顯休命。』受策以出，出入三覲。：癸亥，王子虎盟諸侯于王庭。：君子謂是盟也信。謂晉於是役也，能以德攻。」

(9) 『春秋左氏傳』昭公三年「春王正月，鄭游吉如晉，送少姜之葬。：子大叔（游吉）曰「將得已乎。昔文襄之霸也，其務不煩諸侯。令諸侯三歲而聘，五歲而朝，有事而會，不協而盟。」杜注「晉文公襄公。明王之制，歲聘間朝，在十三年，今簡之。」王利器はこのことを指すという。

(10) 周襄王は、亡き後母恵后の寵兒弟子帯の起こしたクーデターのために、鄭の汜に避難した。襄王は魯・秦・晋に救援を求めた。晋文公は諸侯の信を集めるチャンスととらえ、軍を出して襄王を迎えて王城に帰還させ、子帯（大叔）を捕らえて殺した。『春秋左氏傳』僖公二十五年「秦伯師于河上，將納王。孤偃言於晉侯曰『求諸侯，莫如勤王。諸侯信之，且大義也。繼文之業，而信宣於諸侯，今爲可矣。』：晉侯辭秦師而下。三月甲辰，次于陽樊，右師圍溫，左師逆王。夏四月丁巳，王入于王城。取大叔于溫，殺之于隰城。戊午，晉侯朝王，王饗醴，命之宥。」

(11) 『春秋左氏傳』昭公九年「叔向謂宣子曰『文之伯也，豈能改物。翼戴天子，而加之以共。』」杜注「言文公雖霸，未能改正朔易服色。翼，佐也。」

(12) 注(6)参照。

(13) 『論語』憲問「子曰『晉文公諱而不正，齊桓公正而不譎。』」

(14) 『春秋左氏傳』僖公三十年「九月甲午，晉侯、秦伯圍鄭，以其無禮於晉，且貳於楚也。晉軍函陵，秦軍汜南。佚之狐言於鄭伯曰『國危矣。若使燭之武見秦君，師必退。』公從之。：（燭之武）夜縋而出，見秦伯曰『：闕秦以利晉，唯君圖之。』秦伯說，與鄭人盟，使杞子、逢孫、楊孫戍之，乃還。」

(15) 晋文公の埋葬前、晋の隙に乗じて秦穆公は大夫蹇叔の制止を聞かず鄭を伐った。喪中の晋襄公は白い喪服を黒く染めて秦を伐った。「黄髮」は老人の事で蹇叔を指す。『春秋左氏傳』僖公三十二年「杞子自鄭使告于秦曰『鄭人使我掌其北門之管。若潛師以來，國可得也。』穆公訪蹇叔。蹇叔曰『勞師以襲遠，非所聞也。師勞力竭，遠主備之，無乃不可乎。師之所爲，鄭必知之，勤而無所，必有悖心。且行千里，其誰不知。』公辭焉，召孟明、西乞、白乙，使出師於東門之外。蹇叔哭之曰『孟子，吾見師之出而不見其入也。』公使謂之曰『爾何知中壽，爾墓之木拱矣。』蹇叔之子與師，哭而送之曰『晉人禦師，必於殽。殽有二陵焉。其南陵夏后臯之墓也。其北陵文王之所辟風雨也。必死是間。余收爾骨焉。』秦師遂東。」僖公三十三年「（晋襄公）遂發命遽興姜戎。子墨衰經。：夏四月辛巳，敗秦師于殽。：秦伯素服郊次，鄉師而哭曰『孤違蹇叔以辱二三子，孤之罪也。』『尚書』秦誓「秦穆公伐鄭，晋襄公帥師敗諸崤，還歸，作秦誓。公曰『：惟古之謀人，則曰未就予，忌，惟今之謀人，姑將以爲親。雖則云然，尚猷詢茲黃髮，則罔所愆。』」『漢書』蒯伍江息夫傳「丞相（王）嘉對曰『：昔秦繆公不從百里奚，蹇叔之言，以敗其師，悔過自責，疾誅誤之臣，

思黃髮之言，名垂於後世。』

(16) 『史記』秦本紀によれば、秦から逃げて楚の里人に捕えられた百里奚を、彼の賢明であるのを聞いた繆公が殺皮(羊の皮)五枚で購入、国政を任せ五殺大夫と呼んだが、この時すでに七十歳を超えていた。百里奚が蹇叔を自分より賢であるとして推薦すると、繆公は蹇叔を上大夫にした。伐鄭の際には、百里奚も蹇叔とともに制止した、とある。商君列傳中で趙良が語るエピソードはこれとは相違する。その死については「五殺大夫死，秦國男女流涕，童子不歌謠，春者不相杵。此五殺大夫之德也」とあるだけで、繆公が殺したことは言わない。蒙恬列傳には百里奚が罪せられたことが載せられている。注(18)参照。

(17) 『詩經』秦風黃鳥毛序「黃鳥哀三良也。國人刺繆公以人從死而作是詩也。」『春秋左氏傳』文公六年「秦伯任好卒。以子車氏之三子奄息、仲行、鍼虎爲殉。皆秦之良也。國人哀之，爲之賦黃鳥。君子曰『秦繆公之不爲盟主也宜哉。死而弃民，先王違世，猶詒之法，而況奪之善人乎。』今縱無法以遺後嗣，而又收其良以死，難以在上矣。」君子是以知秦之不復東征也。」秦本紀「三十九年，繆公卒，葬雍。從死者百七十七人，秦之良臣子輿氏三人名曰奄息、仲行、鍼虎，亦在從死之中。秦人哀之，爲作歌黃鳥之詩。」(18) 『史記』蒙恬列傳「蒙毅對曰『昔者秦繆公殺三良而死，罪百里奚而非其罪也。故立號曰繆。』」蔡邕『獨斷』下「布德執義曰繆，……名實過爽曰繆。」『爾雅』釋言「爽，差也。爽，忒也。」『論衡』福虛「夫謚者行之迹也。迹生時行，以爲死謚。繆者誤亂之名，文者德惠之表。……案繆公之霸，不過晉文。晉文之謚，美於繆公。」

(19) 『春秋左氏傳』隱公十一年「秋七月(魯・齊・鄭が協力して許を攻め克った。当初齊は魯に許をゆだねようとしたが、魯が断つたので鄭に与えた。鄭は許を併合しようとはせず、許の内政が整うまで援助をし、その後手を引くことにした。これに対する君子の評)君子謂、鄭莊公於是乎有禮。禮經國家，定社稷，序民人，利後嗣者也。許無刑而伐之，服而舍之。度德而處之，量力而行之，相時而動，無累後人，可謂知禮矣。(その後鄭と息の間に行き違いがあり、息が鄭を攻めたが大敗した。)君子是以知息之將亡也。不度德，不量力，不親親，不徵辭，不察有罪，犯五不韙而以伐人，其喪師也，不亦宜乎。」

(20) 齊桓公には六人の公子がおおり、桓公と管仲は公子昭(孝公)を大子として宋襄公に託した。僖公十七年十月齊桓公が死ぬと五公子が争い、公子無虧が立てられると孝公は宋に奔った。『春秋左氏傳』僖公十八年「春，宋襄公以諸侯伐齊。三月，齊人殺無虧。……齊人將立孝公不勝，四公子之徒，遂與宋人戰。夏五月，宋敗齊師于甗，立孝公而還。秋八月，葬齊桓公。」僖公十九年「春。……宋人執滕宣公。夏，宋公使邾文公用鄆子于次睢之社，欲以屬東夷。……宋人圍曹，討不服也。子魚(公子目夷)言於宋公曰『……今君德無乃猶有所闕，而以伐人，若之何。盍姑內省，德乎無闕而後動。』」

(21) 『春秋左氏傳』僖公十六年「春，隕石于宋，五，隕星也。六鷁退飛，過宋都，風也。周内史叔興聘于宋。宋襄公問焉曰『是何祥也。吉凶焉在。』對曰『今茲魯多大喪。明年齊有亂。君將得諸侯而不終。』退而告人曰『君失問，是陰陽之事，非吉凶所生也。吉凶由人。吾不敢逆君故也。』」『春秋公羊傳』「五石六鷁，何以

書。記異也。外異不書，此何以書。爲王者之後，記異也。」何休解詁「襄欲行霸事，不納公子目夷之謀，事事耿介自用，卒以五年見執，六年終敗。如五石六鷁之數。」『漢書』五行志下之下「釐公十六年『正月戊申朔，隕石于宋，五。是月，六鵠退飛，過宋都。』董仲舒、劉向以爲象宋襄公欲行伯道，將自敗之戒也。……天戒若曰，德薄國小，勿持炀陽，欲長諸侯，與彊大爭，必受其害。襄公不寤，明年齊威死，伐齊喪，執滕子，圍曹，爲孟之會，與楚爭盟，卒爲所執。後得反國，不悔過自責，復會諸侯伐鄭，與楚戰于泓，軍敗身傷，爲諸侯笑。」

(22) 『春秋左氏傳』僖公二十一年「春，宋人爲鹿上之盟，以求諸侯於楚。楚人許之。公子目夷曰『小國爭盟，禍也。宋其亡乎。幸而後敗。』：秋，諸侯會宋公子孟。子魚曰『禍其在此乎。君欲已甚，其何以堪之。』於是楚執宋公，以伐宋。冬，會于薄，以釋之。子魚曰『禍猶未也。未足以懲君。』僖公二十二年「三月，鄭伯如楚。夏宋公伐鄭。子魚曰『所謂禍在此矣。』：楚人伐宋以救鄭。宋公將戰，大司馬固諫曰『天之弃商久矣。君將興之，弗可赦也已。』弗聽。冬十一月己巳朔，宋公及楚人戰于泓。宋人既成列，楚人未既濟。司馬曰『彼衆我寡，及其未既濟也，請擊之。』公曰『不可。』既濟而未成列。又以告，公曰『未可。』既陳而後擊之。宋師敗績，公傷股，門官殲焉。國人皆咎公。」僖公二十三年「春，齊侯伐宋圍緡，以討其不與盟于齊。夏五月，宋襄公卒，傷於泓故也。」

(23) 『史記』楚世家「(武王)三十七年，楚熊通怒曰『吾先鬻熊，文王之師也，蚤終。成王舉我先公，乃以子男田令居楚，蠻夷皆率服。而王不加位，我自尊耳。』乃自立，爲武王，與隨人盟而去。」

於是始開濮地而有之。」

(24) 『春秋左氏傳』宣公三年「楚子伐陸渾之戎，遂至於雒，觀兵于周疆。定王使王孫滿勞楚子。楚子問鼎之大小輕重焉。對曰『在德不在鼎。』」

(25) 『春秋左氏傳』宣公十四年「楚は晋への使者が宋を通る際挨拶をさせず、宋が使者を斬るよう仕向けた。」秋九月，楚子圍宋。「宣公十五年「夏五月，：宋人懼，使華元夜入楚師，登子反之牀，起之曰『寡君使元以病告，曰敝邑易子而食，析骸以爨。雖然城下之盟，有以國斃不能從也。去我三十里，唯命是聽。』子反懼與之盟，而告王。退三十里，宋及楚平。華元爲質，盟曰『我無爾詐，爾無我虞。』」

### 〔訳〕

謹んで考察いたします。『春秋』の左氏学派の説では、禹の孫、夏王太康は逸樂に耽り、民を治めることに勤めなかつたので、諸侯が離反し僭越な行爲をした。そこで昆吾氏が盟主となつて王命に従わないものを誅殺し、王室を尊重した。殷が衰退すると、大彭氏と豕韋氏が相繼いで王室を支え存続させた。いわゆる「王道が廢れて霸業興る」である。

齊の桓公は九度諸侯の会盟を主導し、天下を一つにまとめ、率先して周王室を補佐した。強国となつた楚を討伐し、周王室を軽んじて祭祀に使用する菁茅の献上を怠つた罪を責め、菁茅の貢を復活させた。晋の文公は宋を守つて楚を討ち負かし、踐土に王宮を築いて諸侯の会盟を実現し、周襄王から策命を賜り侯伯となつた。諸侯が三年ごとに朝

廷に使節を送り五年ごとに朝見する「朝聘の礼」を定めた。周襄王の弟子帯が叛乱を起こすと、軍を出して子帯を殺し、国外に逃げていた襄王を迎えて王城に帰還させた。このように天子を戴いて支えたのである。孔子は斉桓公の功績について、「民は今に到るまでその恩恵を受けている」と賞賛し、また「斉の桓公は正しく偽りの行いが無いが、晋の文公は偽りの行いがあって正しくない」とも評している。

しかし、残りの三国（宋・秦・楚）については嘆く言葉も誉める言葉も一言もない。しかも秦穆公は魯僖公三十年、晋文公とともに鄭を包围しながら、鄭が送った使者燭之武の甘言に乗せられ鄭と盟を交わし、杞子らに守備を任せて退いた。僖公三十一年、黄髮の老大夫蹇叔の制止を聞かず、晋文公死後の隙について鄭を攻めたが、殺での戦で喪中の晋襄公の返り討ちにあった。無実の賢臣百里奚を殺し、自分が死んだ際には子車氏の三兄弟を殉死させ、秦の人びとが「黄鳥」の詩を作ってそれを悼んだ。このように過誤が多かったので「繆」という諡がつけられたのである。宋襄公は自分に徳と力も欠けているのを顧みず、斉桓公に託された遺子孝公を擁して斉の後継争いに介入するなど、己の欲望によって覇者の名ばかり求めて軍を動かし、覇者の実を満たすことはなかった。僖公十六年春、宋に五個の隕石が落下し宋都の上空を六羽の鷓鴣が退飛するという異常な現象が起こったのは、襄公が敗死する予兆であった。その五年後の僖公二十一年、諸侯と孟で会盟した際襄公は楚に捉えられ後釈放されたが、翌年それに懲りることなく楚に

ついた鄭を伐ち、楚と戦った。しかし楚の戦列が整うまで攻撃しなかったため敗北し、自身も股に負傷し、二十三年それがもとで亡くなり、諸侯に笑われる結果となった。楚莊王は武王以来王号を僭称し、諸侯の身にも拘わらず周王を圧迫、周の王都で觀兵をし、定王から慰勞のため派遣された王孫滿に王権の象徴である鼎の大小軽重を問うた。強大な武力を恃み怒りに任せて宋を攻め、滅亡寸前に追い込み、囲まれた宋の人びとは、子どもを互いに交換して食い、死者の骨を割って薪代わりにするほどの飢餓に苦しんだ。このように莊王の起こした禍もまた巨大である。彼ら三人は皆滅びかけた国や後嗣の絶えた国を復興する功績もなく、周王室を尊重して扶助する功業もなかった。世の記録者がその事実の本末も詳細に觀察せず、竹帛にこの三者を斉桓公・晋文公の伯功と同等に記し、後世の学者を誤らせることになってしまった。なんと不明なことか。

伯者、長也、白也、言其咸建五長(1)、功實明白(2)。或曰霸者、把也(3)、駁也(4)。言把持天子政令、糾率同盟也。桓公問管仲、「吾何君也。」對曰「狄困於衛、復兵不救、須滅乃往存之。仁不純、爲霸君也(5)。」

蓋三統者、天地人之始、道之大綱也(6)。五行者、品物之宗也。道以三興、德以五成、故三皇、五帝、三王、五伯、至道不遠、三五復反(7)、譬若循連環、順鼎耳(8)、窮則反本、終則復始也(9)。

〔注〕

(1) 『尚書』益稷「弼成五服，至于五千，州十有二師，外薄四海，咸建五長，各迪有功，苗頑弗卽工。帝其念哉。」孔傳「薄，迫也。言至海諸侯，五國立賢者一人爲方伯，謂之五長，以相統治，以獎帝室。」

(2) 『獨斷』上「三公者天子之相，相，助也，助理天下，其地封百里。侯者侯也，侯逆順也，其地方百里。伯者白也，明白於德，其地方七十里。子者滋也。奉天王之恩德，其地方五十里。男者任也，立功業以化民，其地方五十里。」

(3) 『白虎通義』號「或曰五霸謂齊桓公、晉文公、秦穆公、楚莊王、吳王闔廬也。霸者伯也。行方伯之職，會諸侯朝天子，不失人臣之義。故聖人與之。非明王之法不張。霸猶迫也，把也。迫脅諸侯，把持王政。」

(4) 『荀子』王霸「故曰『粹而王，駁而霸，無一焉而亡。』此之謂也。」楊倞注「粹，全也。若舜舉皋陶，不仁者遠，卽巨用之，綦大而王者也。駁，襍也。若齊桓外任管仲，內任豎貂，則小巨分流者。無一焉而亡，無一賢人，若厲王專任皇甫、尹氏，卽綦小而亡者也。」

(5) 『太平御覽』五三六「尚書中候曰『維歲二月，侯在東館（鄭玄注曰維，辭也。侯，齊桓公。館，舍也。）嘆曰於戲仲父，寡人聞古霸王封太山，刻石紀號，立顯象。今寡人，名爲何君。』管子曰『衛困于狄，案兵，須滅乃存之。仁不純，名爲霸君。昔古聖王，功成道洽，符出乃封太山。今比目之魚不至，鳳凰不臻，麒麟遜，未可以封。』『春秋左氏傳』閔公二年「冬十二月，狄人伐衛。衛懿公……及狄人戰于熒澤，衛師敗績，遂滅衛。衛侯不去其旗，是以甚敗。狄人囚史華龍滑與禮孔，以逐衛人。……狄入衛，遂從之，

又敗諸河。初惠公（懿公之父）之卽位也少。齊人使昭伯蒸（惠公の庶兄）於宣姜（惠公の父宣公夫人），不可強之，生齊子、戴公、文公、宋桓夫人、許穆夫人。文公爲衛之多患也，先適齊。及敗，宋桓公逆諸河，宵濟。……立戴公以廬于曹。……齊侯使公子無虧帥車三百乘、甲士三千人，以戍曹。」『史記』衛康叔世家「戴公申，元年卒。齊桓公以衛數亂，乃率諸侯伐翟，爲衛築楚丘，立戴公弟燬爲衛君，是爲文公也。文公以亂故奔齊，齊人入之。」

(6) 『漢書』楚元王傳「（劉）向上疏諫曰「……故賢聖之君，博觀終始，窮極事情，而是非分明。王者必通三統，明天命所授者博，非獨一姓也。」應劭曰「二王之後，與己爲三統也。」孟康曰「天地人之始也。」張晏曰「一曰天統，爲周十一月建子爲正，天始施之端也。二曰地統，謂殷以十二月建丑爲正，地始化之端也。三曰人統，謂夏以十三月建寅爲正，人始成之端也。」師古曰「二家之說皆不備也。言王者象天地人之三統，故存三代也。」

(7) 「三皇」條第一段注(20)参照。

(8) 『易』鼎「六五，鼎黃耳，金鉉，利貞。象曰鼎黃耳，中以爲實也。」

(9) 『太平御覽』七六「周書曰『三王之統，若循環，周則復始，窮則反本。』『史記』高祖本紀「太史公曰……三王之道，若循環，終而復始。」

### 〔訳〕

伯とは長であり、白である。『尚書』益稷に「みな五長を建てると、五国毎に賢者一人を建てて方伯としたことが書かれているが、この「長」のことをいい、また功業実績が明白なことをいう。別説では、霸とは把であり、駁（雜、

不純)である。天子の政令を把持して、諸侯を糾合して同盟を主導することをいう。斉桓公は(封禪の意欲をもったとき)管仲に「私は何君か」と聞いた。管仲は「狄が衛を攻めたとき、姻戚であるのにすぐに兵を出して衛の救援をせず、滅ぶのを待ってやつと兵を出して立て直しました。仁の人でありながら不純なところを合わせ持つ、覇君と言えるでしょう」と答えた。

そもそも三統とは天地人の始めであり、道の大綱である。五行とは万物の大本である。道は天地人、三道がそろって始めて興隆し、徳は物の大本である木火土金水、五徳がそろってやつと完成する。故に三皇、五帝と一周すれば、また三王、五伯と、三統五行が反復するので、至道は遠ざかることはない。喩えてみれば連環がどこまでも続き、鼎の耳が金の鑲で満たされるようなものである。窮極に至ればまた本にもどり、終わればまた始まるのである。